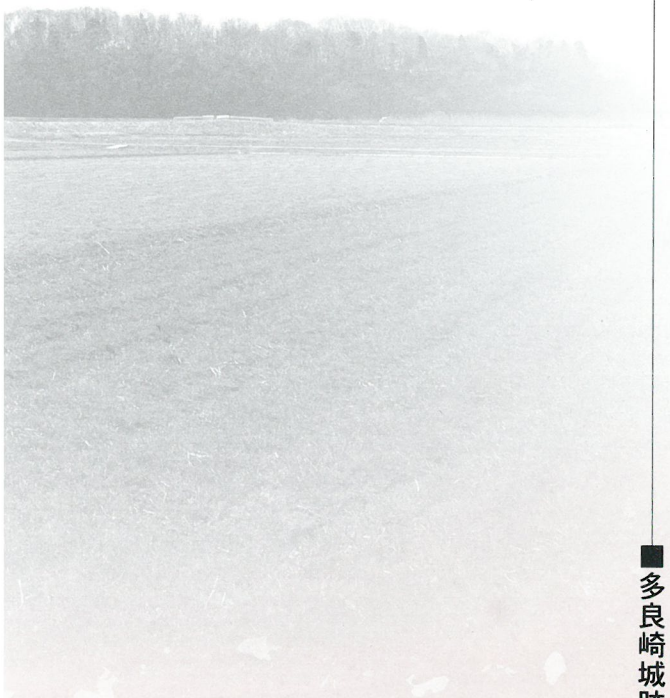
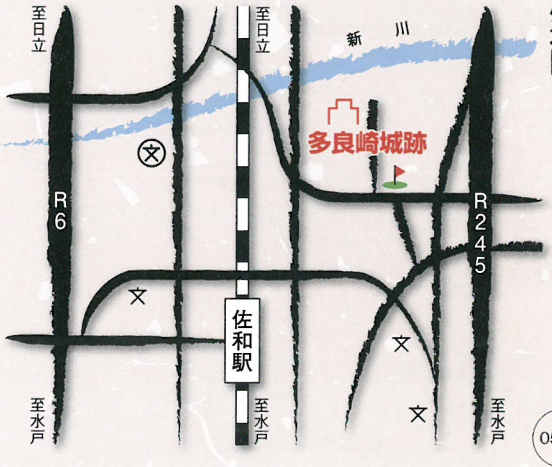


■多良崎城跡周辺図



05.03

R100 PRINTED WITH SOY INK
古紙配合率100%再生紙及び大豆油インキを使用しています。

ひたちなか市指定史跡

多良崎城跡

ひたちなか市教育委員会

ひたちなか市指定史跡

多良崎城跡

【たらざきじょうあと】

多良崎城跡はひたちなか市大字足崎字館に所在する。旧真崎浦、現在の新川流域に突出した半島状の台地上に位置している。地元では古くより「リュウガイ」と呼ばれ、城跡であることが知られていた。江戸時代の『水府志料』には、「館跡　リウガイと呼ぶ所にあり、要害の訛なるべし。何人の居なるをしらず。按、大掾系図、吉田三郎兼幹の第二子多良崎次郎盛忠あり。此人の居処ならん歟。」と書かれている。

多良崎城は南・北・西側の三方が急斜面となっており、かつては海水の入り込んでいた真崎浦により隔絶され、防備に適した地形を巧みに利用して構築されている。

昭和48年に実測調査が行なわれ、本郭・二の郭・三の郭・屋形跡・虎口（大手口）・隅櫓跡・土塁・空堀・堀底道・烽火台・水の手・木戸跡などの遺構がほぼ完全な状態で残っていることが確認された。測量調査時には本郭内から多量の常滑焼大甕の破片が出土しており、この遺物から鎌倉時代から南北朝時代にかけて築城されたものと考えられている。

市内には中世に築かれた多くの城館跡が数多く残っているが、特に残存状況がよく築城様式等を知る重要な城跡であるため昭和48年に史跡指定を受けている。

本郭は尾根の頂上を平坦にし、一辺約55メートル、高さ2.5メートルの土塁を方形に廻らせている。東側に虎口（大手口）が土塁を切って設けられており、南と西には土塁を張り出して隅櫓跡が認められる。東西の土塁に沿った平坦部に屋形が構築されていたと推定されており、測量調査時に常滑焼大甕の破片が出土している。

二の郭は本郭の北側に位置する。約50メートルの３本の土塁に囲まれ、三角形を呈する。本郭よりやや低く、土塁の一部に櫓跡と思われる部分が残る。

三の郭は本郭・二の郭よりさらに低く、尾根の突端を含む広い範囲を有している。空堀・土塁・武者走・烽火台跡などが残っている。

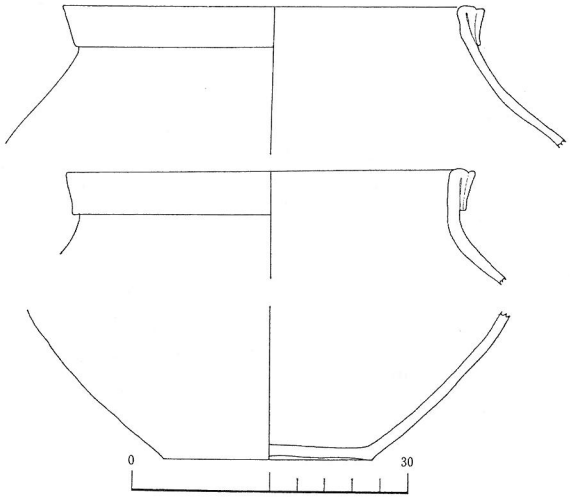
堀底道は二の郭と三の郭との間の空堀が堀底道として作られている。巾２メートル、長さ60メートルを測る。

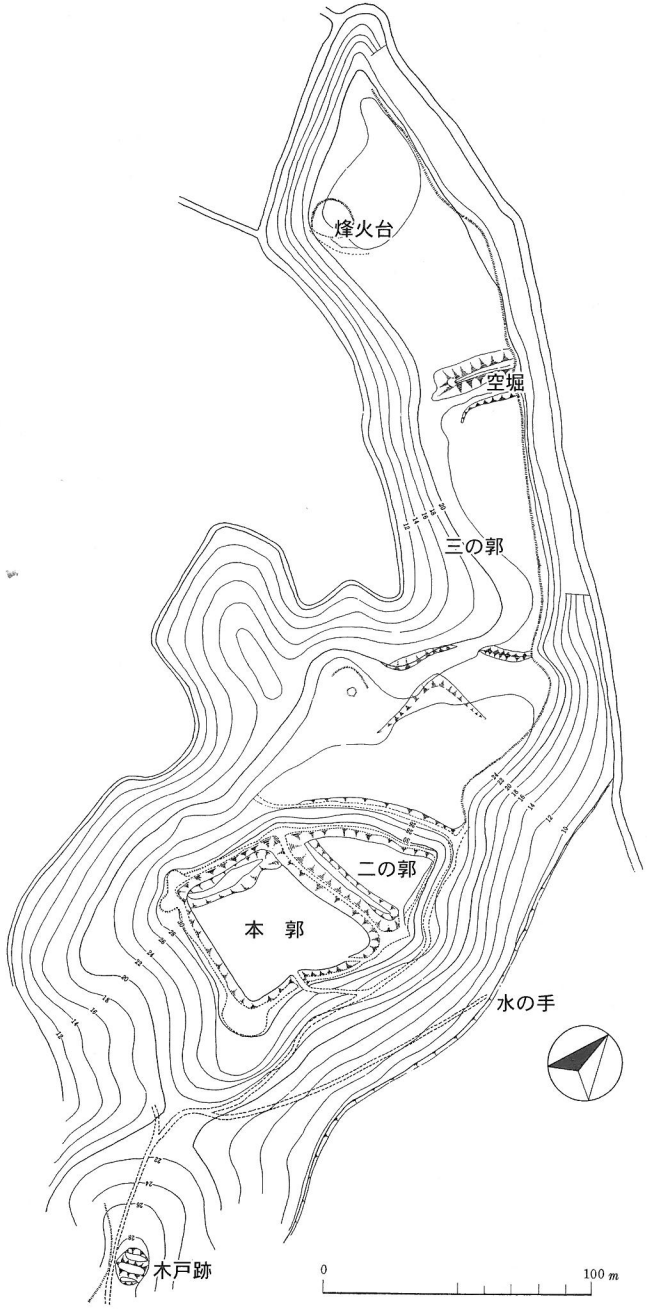
木戸跡は本郭虎口（大手口）に通じる尾根上の狭い道をさえぎるように２箇所に築かれていた。

水の手は本郭の東側下の低地にあり、自然の湧水を利用した水源である。

烽火台は三の郭の突端近くに直径20メートル、高さ2.5メートルで存在した。眺望が極めてよく、烽火台または物見塚として機能したと考えられる。

遺物実測図





多良崎城跡実測図